

<国内情勢>

神話と伝説と日本文明の使命

藤井 巖 喜

(国際政治学者)

1. 歴史と伝説と神話の関係

「美化ほど人の能力の中で素晴らしい能力はない」と保田與重郎は言った。

歴史というのは一応、文献でたどれる範囲の過去の物語である。

この歴史の彼方に「伝説の時代」があり、さらにその彼方に「神話の世界」がある。

もっとも最近では、様々な科学的手段を用いる考古学というものが発展し、文献のない伝説や神話の時代にも実証研究の関心が向けられることになった。伝説や神話であったものが、歴史的事実として認定されることも有り得るのだ。考古学が伝説を歴史の世界に引き寄せた好例に、シュリーマンによる「トロイ遺跡の発掘」がある。

イスラエルには聖書考古学というものがあり、聖書の伝説の世界が考古学によって歴史的事実として認定される実例が相次いでいる。いつの日か神武天皇の实在が科学的に実証される日が来るのではないかと、筆者は期待している。

だから歴史と伝説と神話の境界線は一定のものではない。

時代と共に動く相対的なものである。しかし、実証的な歴史研究が及ぶその先に、伝説というものがあり、さらにその先に神話というものがある、という区別は極めて重要である。過去におきた事実というものがある。むき出しの事実である。この事実には人の美化能力が作用し…物語が生まれ…これが伝説となり…やがて神話となる。

あるがままの事実と人間性が美化され…純化される。善も悪も純化され…形而上化され…伝説化され…そして神話化される。このようにして、伝説と神話という民族の物語が生まれる。伝説や神話にまで純化されなければ、真の民族の物語とは言えない。

美化・純化とは、夾雑物をそぎ落とし、本質そのものになるということだ。

神話と伝説とは、民族の過去の物語であるばかりではなく、未来の物語でもある。

神話は民族の本質をあらわにするが故に民族の未来を、そしてその終末を明示的に、もしくは暗示的に顕現する。

美化・純化する能力は、あるべき人類の究極の姿を示すのである。

2. 日本民族の人類の使命

日本民族の使命と未来は、日本神話の三大神勅によって既に明らかである。

「生ける大宇宙イコール大生命、イコール大自然と調和したる人類文明を築くこと。」

それが日本民族に与えられた使命である。そのような文明を建設する先導役を果たすことが神によって日本民族に与えられた究極の使命である。日本神話の三大神勅はこのことを雄弁に物語っている。あるいは日本民族が自覚した使命感が、神話の三大神勅という形で表現されているのだ。日本以外の文明は、発達すればするほど不安定になり、大自然の摂理から遊離する傾向にある。そうではなくて、日本民族が目指す文明とは、発達すればするほど、大自然の調和と一致してゆく文明である。

かつての大阪万博のテーマ「**人類の進歩と調和**」であったが、実は「**進歩こそが調和**」であるような文明こそ、日本民族が求めてきた、また実践してきた文明である。

縄文一万年の底力が、それを可能にする。物理学者のホーキングが「**何故、宇宙には人類のような文明を発達させた生物が存在しないか**」と問われた時に、次のように答えている。「**宇宙には恐らく、いくつもの知的生命体による文明が発達していた。しかし文明は発達すればするほど不安定になるので、それらの先進文明は全て崩壊して、姿を消してしまったのだ。**」

このホーキングの説明が正しいかどうか分からないが、少なくとも我々人類が生み出した過去のいくつもの文明の共通の欠点を言い当てている。文明は発達するに従い都市化し…集中し…大自然の生態系の調和と乖離し…やがて滅んでいったのである。

ところが日本では文明は、そのような悲劇をもたらさないで、1億6千年前から続いている。世界最古の土器は、縄文草創期の土器である。

それはメソポタミアでもエジプトでもない。ゆうに一万年以上も続いた縄文文明は、日本文明の最も重要な基礎であり、そこにおいては文明の発展は即ち大自然の生態系との調和そのものであった。恐らくは縄文文明が昇華し発展したものが弥生文明であり、この時に日本民族が自覚した内容こそ、三大神勅である。この時、日本人は日本文明の存在理由を自覚し、その理想の実現に向けて未来へと歩き出したのである。

公害や環境汚染の問題、その完全解決の為のすべての解答は、日本文明の中にある。

大自然の偉大な浄化作用をあまりに無邪気に信じすぎたところから、四大公害病などの重大な環境汚染の悲劇が生じたが、またそこからの学習と反省も日本人は速かった。

3. 宗教戦争の時代と日本文明

環境汚染と並ぶ、もう1つの人類の大問題は戦争である。

戦争は人類史で三段階の変化を経て、今日に至っている。第1段階は、民族・国家間の生存競争としての戦争であった。第一次世界大戦までは、この種の戦争であった。

第2段階は、体制・思想・世界観の違いに起因する戦争であり、第二次世界大戦と米ソ冷戦がこれに当たる。

第3段階は、現在の戦争である。これは「**宗教戦争**」の時代である。過去にも宗教戦争は局地的にはあったが、今は世界的宗教戦争の時代である。そして問題の中核は、セム族系一神教たるユダヤ教・キリスト教・イスラム教の三つ巴の世界戦争である。

この戦争を終結させるツボは、ユダヤ教徒の救済である。ユダヤ教からキリスト教が生まれ、さらにイスラム教が生まれた。それにも関わらず、ユダヤ教徒はキリスト教世界で長く差別に苦しんだ。国を持ちえず、悲惨な歴史を歩んだ。

ユダヤ民族は祖国建国の宿願を果たしたが、そこはイスラム教圏で、周辺のイスラム教国はイスラエルに継続的な脅威を与えている。ユダヤ人は宿願の国家を建設したにも関わらず差別から、そして危険から解放されていない。ユダヤ人のアイデンティティの中心はユダヤ教であり、この民族は少数派である以上、宗教、とくに一神教の世界の中では、ユダヤ人差別を抑制することは出来ても差別を完全に解消することは出来ない。

宗教的権威を持ち出して、ユダヤ人差別をなくすことは出来ない。

キリスト教にはキリスト教の権威があり、イスラム教にはイスラム教の権威があるからだ。宗教的権威ではなく、共産主義や社会主義に基礎を置く政治権力も、ユダヤ差別を解消できなかった。これは旧ソ連の実態を見れば明らかである。

金の力（金力）や権力という世俗的力が、ユダヤ人差別を解消できぬことは明白である。宗教的でも世俗的でもない権威が存在するのか？ 存在すれば、それがユダヤ人のアイデンティティを保持せしめながら、ユダヤ人を解放し、共済しうる何者かである。

宗教的でも世俗的でもなく、少なくとも三千年に渡って継続している権威がこの世界にただ1つだけ存在する。それが日本の天皇、即ち「**スメラミコトの権威**」である。

そして天皇は、一神教的意味においては、まったく宗教的ではない。天皇は、いかなる迷信からも神秘主義からも自由である。この点において、多神教的意味においても、超宗教的である。天皇は地球上における唯一の、「**超宗教的＝超世俗的権威**」なのである。

同時に天皇は超民族的でもある。生態系と調和的な文明の創造、その使命を自覚した人々の中心が天皇と呼ばれたのだ。天皇を中心に団結した人々が「**日本人**」と呼ばれたのだ。誰でもが自らの宗教を保持したままに、日本人になれる。

すべての人間は、天皇の前に平等である。天皇は、如何なる宗教の如何なる出自の人間をも…如何なる肌の色の人間をも…差別せず「**平等**」に扱う。

今日の世界の根幹たる問題のユダヤ人差別は、ユダヤ人が天皇を奉戴し、自らその権威をいただくことによって解消する。ユダヤ教徒も…イスラム教徒も…キリスト教徒も…天皇の前には平等である。天皇は世界平和をも含む宇宙の生態系の調和を祈り、全ての存在を祝福する人、祝福する聖人であり、同時にただの人である。

天皇という結節点において、聖と俗ははじめて、連結・融合するのである。

4. 戦争と平和と日本文明

日本人はみな、平和主義者である。

武勇という徳さえ、美化し、倫理化し、日本人は**「武士道」**なる人の道を作った。

日本では、兵器さえも美しい。ゼロ戦や日本刀の美しさを見るがよい。日本人にとっては、美化は即ち倫理化なのである。武士道は他者を征服する道ではなく、人間の名誉と誇りを重んずるヒューマニズムそのものである。

より高い目的の為の自己犠牲こそが武士道の本質である。武士道は天皇にはじまり、天皇によって完成し、明治維新以降は国民道徳となった。教育勅語とは即ち、国民すべてを武士化しようとする試みであった。

「戦後民主主義者」をも含む、全ての平和主義者に告げよう。日本の伝統を重んじる我々は全て平和主義者である。戦争の廃絶と世界の恒久平和を望んでいる。戦争の廃絶の為の、全ての国家の軍備の放棄、世界連邦の誕生は、我々の理想でもある。しかしそれは100年~1,000年単位の人類史において、しかも全ての国家が、同時に軍備を放棄して、はじめて実現する理想である。

日本が、弱肉強食の現代において軍備を放棄すれば「飢えたる狼の群れの中のか弱き羊」となるだけである。現在における軍備の放棄は、寧ろ集団安全保障を軸に世界の安全を図ろうとする国際的努力に背を向けることになりさえする。

我々は憲法9条を改正し堂々たる軍隊をもち、侵略を抑止し人類の安全を一步一步、確実にする道を歩まなければならない。日本人の安全を一瞬たりとも危険に晒すべきではない。世界が平和に向けて歩んでいることを確認した後、日本は軍備を縮小してゆけばよい。それ以外の選択肢は存在しないのである。

大東亜戦争すら、まことにやむを得ざる自存自衛のための戦争であった。日本を追い込んだのは、ソ連コミンテルンの謀略だった。

「大東亜戦争は悪しき侵略戦争であったが故に、日本は軍隊をもってはならない」と信じている人々に敢えて尋ねたい。千歩譲って、大東亜戦争が悪しき侵略戦争であったとして、その悪しき日本軍国主義を打ち破ったのは誰であったのか。国際協調主義者、平和主義者の教説の前に、日本は敗れたのか。日本を屈服せしめたのは、連合国の軍事力、特に圧倒的なアメリカの軍事力であった。侵略を打ち破るには、侵略者以上の軍事的実力をもたねばならないのだ。軍事力を正しい目的の為に用いることが勿論、必要である。

一方的な軍事力の放棄は、悪意の侵略者の侵略を招くだけである。